薩摩隼人の誤算

～攻城戦の破綻と不落の城～

内山幹生

西南戦争は近代日本最大の国内戦であった。熊本以南、九州の南半分が戦場となり、その緒戦、最も緊迫した局面の一つが熊本城の攻防である。熊本城は、名城とうたわれ、難攻不落と称えられた。西郷隆盛を首魁とする強兵薩軍の猛攻に耐えたことも、その裏付けと理解されている。堀や石垣・建物等、緻密に計画された巨大な要塞であり、攻略至難の城であったことは間違いないだろう。そこへ薩軍の猛攻である。剽悍薩摩隼人は、当時最強の戦闘集団と目されていた。彼らの攻城戦術はいかなるものであったのか、否、熊本城を攻める際、そもそも戦術があったのか。城攻めの実態をみておかなければならない。

一　戦端

西南戦争についての文献は、官製・私製を問わず厖大な量があり、その全貌把握が困難なほどである。陸軍参謀本部日誌関連・同戦闘経過記録、従軍者の日記等から籠城日誌などまで、内容も多彩である。本稿を起こすに際しては、客観性に優れた川口武定（当時第一旅団会計部長）による『従西日記』、参謀本部陸軍部編『征西戦記稿』、加治木常樹『薩南血涙史』などを参考とした。本文中の引用は、特にことわらない限り、敗者たる薩軍側に身を置いた人物、加治木常樹の著書『薩南血涙史』による。

明治一〇年（一八七七）二月一二日、陸軍大将西郷隆盛、同少将桐野利秋、同篠原国幹の三名は鹿児島県庁を訪ね、県令大山綱良に「拙者共事、先般御暇の上非役にして帰県いたし居候処、今般政府へ尋問之筋有之…」としたためた政府問罪の文書を提出した。翌二月一三日、大山県令は西郷らの政府問罪書面を受け、「旧兵隊等随行、不日に上京の段届出候に付…」という布達に添え、西郷暗殺の密命を受けていたとする警視庁小警部中原尚雄の供述書面を印刷し、県内各地に掲示した。

二月一三日より隊伍編成が開始され、私学校正面の旧藩練兵場に士族が陸続と参集する。翌二月一五日、おりから雪の降りしきる中、鹿児島市内編成部隊の先陣を切って一番大隊が進発し、続いて二番大隊も鹿児島を後にした。二月一五日現在の兵力を示しておく。

鹿児島市内からの編成兵力　一番～五番　↓　五個大隊（五〇個小隊）一万一二五八人

鹿児島市外からの編成兵力　六番～七番　↓　二個大隊（一九個小隊）約一六〇〇人

※合計一万二八五八人（うち砲兵　約二〇〇人）

※砲装備　四斤山砲二八門　一二斤野砲二門　臼砲三〇門（合計七〇門）

（右各砲種を二等分して二個砲隊とした）

二月二〇日午後二時、六番・七番大隊統括司令官別府晋介の率いる薩軍先鋒部隊（加治木隊）は、熊本城下の南方、川尻町に到達している。斥候を出して様子をうかがうと、城下はすこぶる不穏の状態にあった。

熊本鎮台自ら民家に火して城外を清掃し、各所の要部に砲台を増

置し地雷を埋設し、以て益々戦備を厳にし、予め待つあるものに似たり、而して其の火末だ滅せず老幼徒跣東西に迷離し、動揺宛も沸くが如し…

薩軍川尻到着の報を受け、熊本鎮台では参謀長樺山資紀中佐が、「今、専ら居守を主とする、恐らくは士気を阻喪せん」と考え、隅岡長道および小島政利両大尉に川尻の薩軍本営襲撃を命じた。二月二一日午前一時頃、彼らの一隊はひそかに城を出て川尻に至り、そこで薩軍の哨兵に発見されたが、狼狽した鎮台兵は、薩兵より誰何（すいか）を受ける前に銃を乱射してしまう。この衝突が西南戦争最初の戦闘とみられている。

鎮台兵は実戦に慣れていない。薩兵が反撃すると、武器弾薬を遺棄して逃走した。下士官一名が捕らえられ、本営に連行され、別府晋介が自ら尋問し、以下の供述をえた。

鎮台、戦備に従ひ施設する所甚だ多く、城を繞（めぐ）れる幾多の要害は悉く兵を配置して或は鹿柴（ろくさい）を設け、或は橋梁を撤し、以て厳かに侵入に備え、又急に市井の技工を雇役し多数の地雷を製造して、其大部分は之を八幡の高地に埋設し、敵をして予め勝つべからざるの形を為せり、既にして昨、貴軍先鋒川尻に入るの報あり、本夜長官我隊に命ずるに、軽装川尻付近を偵邏し、為し得べくんば敵営を火掃せんことを…

下士官の供述を聞いた薩軍各将校は、熊本城下において戦闘準備が万端整っていることを思い知る。彼らは、「今回の挙に関して深い趣意のあるところを究めず卒意妄断、反徒を以てし、自ら出て戦を挑むその曲は則ち彼にあり」として、最終手段に訴え、鉄火をもって東上することを決議した。翌二一日、後続の薩軍主力部隊は川尻に到着し、先鋒部隊の進言を容れ、すぐさま攻城と決定している。その主たる方針は、

一、軍を分かって正面および背面の二となす

一、正面軍（一五小隊約三〇〇〇人）をもって城の東南面を攻め、背面軍（約四二〇〇）をもって城の西北面を撃つ

というものであった。

これを迎え撃つ熊本鎮台の守備兵力と城域の陣地配置は、二月二二日現在で次のようになっている。

○守備兵力（人数）

本営	一四六
歩兵第十三連隊	一九〇四
砲兵第六大隊	三三〇
予備砲兵第三大隊	九八
工兵第六小隊	一〇六
歩兵第十四連隊	三三一（左半隊、二月一九日小倉営所より入城） 四〇〇（一説に六〇〇名、二月二〇日入城）
警視隊	
	合計三三一五名

※別途、熊本県権令富岡敬明、品川内務書記官ら属官二三名、将校家族一九名、雑吏・人夫があり。この数を加えて総勢三七六九名とされている。

※当時、熊本城には鎮台司令長官谷干城少将、参謀長樺山資紀中佐、参謀副長児玉源太郎少佐らがおり、明治一〇年一月には、参謀本部より川上操六少佐が特派されていた。

○守備配置

①下馬橋　　歩兵一個中隊・山砲一門・警視隊五番組

②法華坂（二之丸）　歩兵一個中隊・山砲二門
③古城　歩兵一個中隊
④千葉城　歩兵一個中隊・野砲一門・山砲一門
⑤埋門・棒安坂　歩兵一個中隊・山砲二門・臼砲一門・警視隊六番組一個小隊
⑥一日亭　歩兵一個中隊
⑦嶽丸　歩兵一個中隊
⑧県庁　歩兵一個中隊・山砲二門・臼砲二門・警視隊四番組
⑨藤崎神社　歩兵一個中隊・野砲二門・山砲一門・臼砲一門・警視隊一番組一個小隊
⑩片山邸　歩兵一個中隊・山砲一門・臼砲一門・警視隊二番組一個小隊
⑪漆畑・野砲営　歩兵一個中隊・野砲一門・山砲二門・警視隊三番組一個小隊
⑫新野砲営　山砲一門・臼砲一門

※その他の歩兵、すなわち歩兵第十三連隊の一個中隊および第十四連隊の全部は、野砲二門および山砲一門とともに城内守備に就き、その他をもって予備とした。

※火砲数　野砲六門　山砲一三門　臼砲七門　（合計二六門）

川尻で薩軍の捕虜となった鎮台下士官の供述、「城を繞（めぐ）れる幾多の要害は悉く兵を配置して或は鹿柴（ろくさい）を設け…」、そのままの状況であった。熊本城の境域は、『新熊本市史』（通史編三巻）によると、茶臼山台地に周域面積約八〇万平方メートル、周囲約五三〇〇メートルに及び、その中の東西南北の諸要害に多くの櫓と出入りの門が構えられ、万全の防備体制にあった。

城郭内の建造物は、最近の調査により、天主二、櫓六七、櫓門一九、冠木門他三三を数える城郭群であったことが判明している。戊辰戦争で攻城戦を経験した会津若松城の周域面積約二四万平方メートルと比較しても、熊本城の圧倒的な城構えが理解できるだろう。籠城軍が主に拠っていたのは、行幸橋から北上した備前堀、から堀、北大手門を経て監物台樹木園、さらに東方向に折れ、棒安坂を下り熊本国税局千葉城分室、厩橋に抜け市役所前の長塀に沿い行幸橋に還る巨大な石垣に囲まれた本丸周域である。

加えて、西北方三之丸、二之丸（当時は歩兵十三連隊屯営）、藤崎台球場、国立熊本病院、合同庁舎、県立第一高校など、籠城地域の四倍あまりの広大な地域が外郭・要害として存在し、この範囲に散在する鎮台諸施設とともに、籠城兵力の前衛陣地・塹壕が隅々まで構築されていた。

二　緒戦

正面戦

薩軍正面軍の先鋒は、元陸軍少佐池上四郎率いる五番大隊で、二月二二日早朝より城の東南方面から攻撃を開始した。この部隊は海路から熊本入りしており、いうなれば脚力を温存し、体力を保持してきた戦力である。正面軍が本荘に至るころ、払暁を期して鎮台砲兵の射撃が始まり、池上は攻撃方面を部署し、長六橋・代継橋・安巳橋・明午橋および龍田山、出町の各方面より前進を開始した。

五番大隊一番小隊（河野小隊）河野主一郎は、薩軍に呼応して旧熊

本藩士で編成された熊本隊竹内武太夫の建言と加勢をえて、城郭に最も近接した加藤神社々域を占領した。そこを拠点にして城壁に迫り、突入をはかるが、鎮台兵の猛射を受け、そのつど押し返されている。村田小隊村田三介は、熊本隊同様薩軍に呼応した熊本協同隊高田露（あきら）の嚮導で安巳橋まで到達していたが、伏兵の攻撃を受け、さらに城中からの激しい砲撃により一時停滞を余儀なくされた。直後、後続の長崎、園田、峰崎の各小隊が安巳橋より相次いで進撃し、村田隊との協同で対岸の千反畑を攻略する。この時点で、城外へ出ていた鎮台兵の一隊は城内に退却した。

正午、池上は休戦を指令し、兵力を一旦安巳橋に集め、攻撃部署を改めて再び城壁突破をはかる。このときの戦いを加治木常樹は、「是に於いて激戦また起こり、敵弾轟々頭上に破裂し、銃丸戛々（かつかつ）脚下に迸轉（ほうてん）し、硝煙砂塵満空に瀰漫（びまん）し、天日為に光を蔵むるの観あり…」と記し、「既にして日暮る、薩軍諸隊少しく退き適宜の陣地に寨を起こし、拠って以て敵と相対し、火戦夜猶昼の如し」と結ぶ。

背面戦

薩軍一番大隊と二番大隊の一部、さらに六番および七番大隊の一部は、二月二二日午前三時から四時にかけて川尻を出発し、六時から七時にかけて各々の待機地点に到着した。直後、一番大隊一番小隊西郷小兵衛を含む二〇個小隊は、相前後して祇園山（のちの花岡山）を越え、段山の正面を衝き、午前一〇時頃、奪取に成功する。鎮台兵はしばしば逆襲し奪還をはかるが、成功せず退却した。一番大隊四番小隊は、城の西北方高台に位置する藤崎八旛宮（現在は井川淵町に移転）に達し、勢いに乗じて城内に突入する勢いであった。別の数個小隊は藤崎宮の右翼について城壁を登ろうとするが、越えることはできない。七番大隊八番小隊はさらに進んで古城および法華坂に迫るが、城内からの応射がすさまじく、退かざるをえなかった。

辺見十郎太は、三番大隊一番小隊を引率して川尻から迎町を経て戦場に到着した。夕刻、祇園山に登り、地形を展望して戦況を概観したところ、薩軍兵士が城内に突入した形跡は見えない。辺見は、「是より我隊を以て城中に突撃せん、諸士斃れて已むの覚悟を以て奮闘すべし」と号令し、ラッパ手の進軍の譜吹奏によって段山堡塁（ほうるい）へ突撃を開始した。城兵は、八幡山より山砲と小銃で応戦し、これを防ぎ撃退する。この後、薩軍二番砲隊は夜半に城下に到着して、熊本城を眼下に見通す祇園山々腹と日向崎の高地に砲座を構築し、四斤山砲一二門を分架し、城中へ向けて砲撃を開始した。

翌二月二三日午前一時、正面の薩軍歩兵部隊は、再び包囲を狭めながら攻城を仕掛ける。払暁より加藤神社の高地、千反畑、安巳橋の三地点から一斉に攻撃したが、午後に至っても戦況は進展しなかった。その他の正面諸部隊も力攻するが、城兵もよく防ぎ、まだ一角も破られていない。薩軍は適所に堡塁を築き、長囲持久の体制を採らざるをえなかった。一方、城の背面に対陣する部隊は、午前一時より三時にわたり主力を挙げて片山邸・法華坂の政府軍陣地を強襲したが不首尾に終わる。

この間、日向崎の薩軍砲兵は、高地によって四斤山砲六門の射撃で戦果を挙げ、「瞰射し照準精妙丸虚発なし」と評された。砲隊の活躍はあったものの、攻囲の歩兵部隊は、

既にして天明るく、花岡山及び日向崎に於ける砲隊各々益々威力

を発揮し、以て歩兵の活動を幇助し、坂本敬介隊高麗門跡を出て県庁の一隅に突進し、逸見（ママ）その右半隊を率ゐて迎町より細工町に出て左半隊と交代し、高城その右半隊を率ゐて三間町より寺原町に出て、その他諸隊また相競って開進し各々城に迫りしも、各処の敵兵必死拒戦し、攻撃功を奏する能はず遂に皆兵を収めて退く、

という事態になり、早くも緒戦にして膠着状態に陥った。

熊本城に拠った政府軍は、「籠城軍」と呼ばれるが、以上のような緒戦の戦闘経過をみても、亀の子のように城郭内に首を引っ込め、手足を縮めていたわけではない。むしろ、あらかじめ築造していた前衛陣地や塹壕・堡塁に出て、果敢に勇戦したといえる。薩軍諸将は、本格的戦闘開始初日にして、攻城方針の再検討を迫られることになった。

三　転機

緒戦における熊本鎮台徴募兵の戦いぶりは、薩軍幹部の予想をはるかに超えたもので、攻城方略を一変させるのに十分であった。二月二二日、薩軍一番大隊長篠原国幹元少将は、熊本城下における幹部会議で熊本城奪取の重要性を述べている。

今敵高壁に拠り包射甚だ急なり、勢当り易からず、若し我れ孤城に屑々として曠日瀰久する、恐らくは進取の機を失せん、宜しく全軍大挙して四面梯登、城裡に闖入すべきのみ、此の城一たび陥らば九州風靡、海裡鼎沸、天下の事手に唾して成るべきなり、

篠原は、熊本城下に到着している全兵力を以て城内へ突入する強攻策を主張した。孤城にすぎない熊本城一つにぐずぐず拘わっていては戦略的機会を失うとし、強襲して落とすことにより九州の士族も薩軍に追従して世の中も沸騰して、天下の事も成るという。結局、彼の主張は容れられ、「乃ち此夜深更を期して事を挙げんとし、先づ旨を押伍（※下士官クラス）以上に伝う、諸隊部将命を領し薄暮各々待機陣地に就き、腕を扼して機の至るのを待つ」ことになり、二月二三日、総攻撃が開始された。

二月二二日夜半、御船方面に迂回していた四番大隊三番小隊長野村忍助は、川尻に入るや、本営の方針が、「戦議強圧」に決定した旨を知らされる。野村には自ら考えるところがあった。いわく、「全軍強圧、成敗を一挙に決せんとする快は則ち快なりと雖も、恐らくは事容易に非ず」と。熊本城のような堅城に拘泥して、いたずらに兵を曝露するのは危険であるという。そのうち政府軍増援部隊が諸方から到着すると、現状兵力で手に負えるものではない。攻城兵力を一部割いて北上し、豊前小倉を占領して政府軍の一兵も海峡を越えさせないようにすることが肝要と訴えた。「果して然らば、孤城重囲の中に在りて飢困自陥るに至らずんば已まじ、正に是れ、一挙両得の道なり」とする主旨からである。

この考えには、他の薩軍将校にも賛同するものがあり、支持もえたが、一様に熊本の本営にはかって議決を受けるべきという。野村は、「事、迅速を尊ぶ、徒に拘泥して躊躇せば必ず軍機を失まらん」と主張したが、彼らは沈黙するのみである。やむなく指揮下の三番小隊を率いて熊本に入り、本営を訪れ持論を展開した。西郷と桐野は、野村の見解を大いに称賛し、野村の一隊を小倉へ出撃させようとしたが、同席していた攻城部隊の指揮官らは、血相を変えてこれをさえぎり、「今におよび我に他をして先んぜしむる如きは、余輩の黙過するに忍

びざる所なり」という。攻城部隊の将校らは、指揮下の部隊が城内突入の熾烈な先陣争いをしているとき、後塵を浴びせかけていたはずの後続部隊が、突如として自らを追い越して東上し、文字通り先陣に立つことに我慢がならなかったのである。

結局、甲論乙駁するのみで結論が出ず、そうなると西郷・桐野の判断に任せざるをえない。彼らは、「城の陥る、まさに近きに在らんとす、全軍長駆小倉に出でんこと、未だ必ずしも晩しとせざるなり」と裁定した。この結論には伏線がある。このときより少し前、熊本隊の士族が薩軍本営に来訪し、「城中食乏し、其の陥る、当（まさ）に近きに在るべし」と告げていた。熊本城の天守は、開戦直前の不審火で焼亡しており、熊本士族は城内の兵糧も焼失していると進言したとみられ、西郷と桐野は、この情報をもって、長囲持久の策を採ることに決めていたのである。しかし実際には、城内の食料事情は切迫していなかった。火災の前に分散蔵置されていたとみられ、熊本城自焼説の根拠にもなっている。

二月二四日、熊本城長囲策決定を受け、薩軍本営では池上四郎を攻城指揮官に決め、各大隊の一部からなる混成部隊を再編成し、攻城部隊とした。その他の主だった将校は、それぞれの部隊を指揮下において桐野利秋が山鹿に、篠原国幹が植木（田原坂）、村田新八と別府晋介は木留、永山弥一郎は松橋周辺の海辺部に出て各々の司令部を設置する。小倉・福岡より南進する政府軍と南部海辺（八代海）より上陸するであろう衝背軍を迎撃する目的であった。この時点の薩軍攻城兵力は次のようになっている。

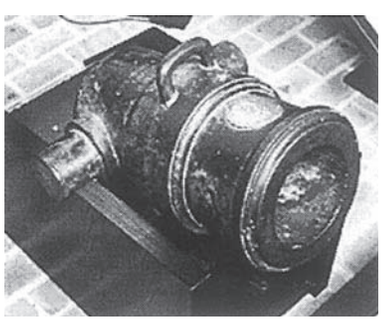
二四個小隊　歩兵四七〇〇名
二番砲隊　四斤山砲複数門・臼砲数門
本営護衛　歩兵二〇〇名

籠城軍に兵糧攻めを仕掛ける一方で、自らの兵站（へいたん）に問題を抱える薩軍、増援軍の早期到着を期待して堅城に拠った籠城軍、かくして双方の給養という面から、いずれの側にも転びうる微妙な兵力バランスの上に戦機は動き出す。二四日以降、政府軍と薩軍は、それぞれの思惑を背景として新しい戦闘段階に突入していった。

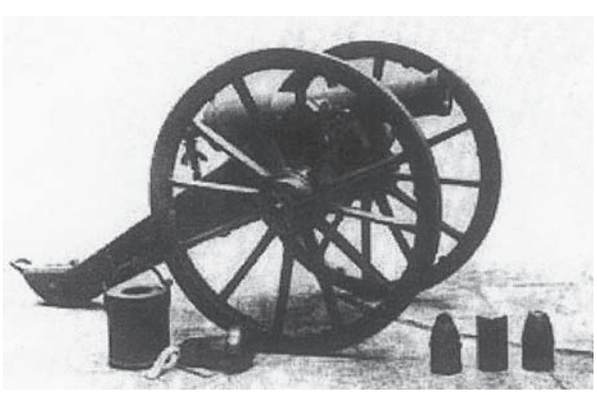
四　火砲

砲戦展開

攻城軍（薩軍）と籠城軍（政府軍）の双方において、戦局展開の重要なファクターとなったのは、火砲の運用である。いずれの使用した



〈参考写真〉20ドイムモルチール（臼砲）
高島秋帆作：武雄市図書館歴史資料館蔵



四斤山砲（フランス製か）
（http//userdisk.webry.biglobe/ne.jp）

花岡山砲座より熊本城天守閣を望む

火砲も、熊本城の攻防に限定すると、各々口径の異なる野砲、山砲、臼砲の三種である。野砲とは野戦で用いる大砲のことで、発砲時の初速が早いので射程も長く、弾道もほぼ直線に近く緩やかな弧を描いて着弾する。砲車に架して移動したが、四斤野砲でも砲身重量三三〇キログラム前後といい、ほぼ同重量の砲車と合わせて牽引するので、輓馬を利用するにしても相当の苦労があった。

運用目的に合わせて、各種の洋式火砲が存在したが、当時の火砲は、現在のようにすべてが口径で表示されていたわけではない。通常、それぞれに使用する砲弾の重さで呼ばれており、四斤山砲・四斤野砲・六斤野砲・十二斤野砲などがある。ただし臼砲（モルチール砲）は、古くよりオランダ製を輸入していた関係から、口径で表示され、二〇ドイム（二〇cmに相当）臼砲などと呼称した。

四斤山砲は四斤野砲と同じ口径で、同重量の椎ノ実型砲弾（四斤＝約一、八キログラム）を発射する。砲身重量が約一〇〇キログラムと軽く、砲車と合わせても二〇〇キログラムを下回っていた。つまり山砲とは、野砲と比較して砲身を短くすることなどで重量を軽くし、運動性を向上させた火砲と考えてよい。薩軍の使用した四斤山砲は、旧藩集成館で製造した国産青銅砲とみられ、砲弾前装式の旋條砲（ライフル＝螺旋溝付）であった。

〈火砲データ〉

（砲種）	（有効射程m）	（最大射程）	（口径mm）	（砲弾種）	（砲身長m）
四斤山砲	六〇〇	二六〇〇	八六、五	榴弾・榴散弾	〇、九六
四斤野砲	一〇〇〇	四〇〇〇	八六、五	榴弾・榴散弾	一、六〇

幕末から明治初頭にかけて生産された国産の洋式大砲は、当時の工業水準からみて、砲身の強度など、生産技術にかかわる部分での不良品が多かったものの、総じて今日考えられている以上に高性能であった。四斤山砲を使用した薩軍祇園山（花岡山）砲座および周辺砲座からの砲撃事例をみてみよう。

西南戦争における砲戦の開始は、二月二二日である。薩軍一番砲隊の山砲と野砲複数門は、熊本城の西北方島崎村高台に進出し、城中へ向けて砲撃を開始した。藤崎台に配置された鎮台砲兵もこれに応戦し、そのうちに互いの砲座を狙い撃つ山砲同士の砲戦へと展開する。二番砲隊は、同日夜半、熊本城下に到着して直ちに城を望む祇園山の山腹と日向崎の高地に砲座を構築した。そこへ四斤山砲一二門を分架し、城中への砲撃を開始する。天守閣焼盡のあと、本丸区域のどこかに避難したであろう鎮台本営（総司令部）への揺さぶりと、城内への突入をはかる歩兵部隊の支援が目的であった。

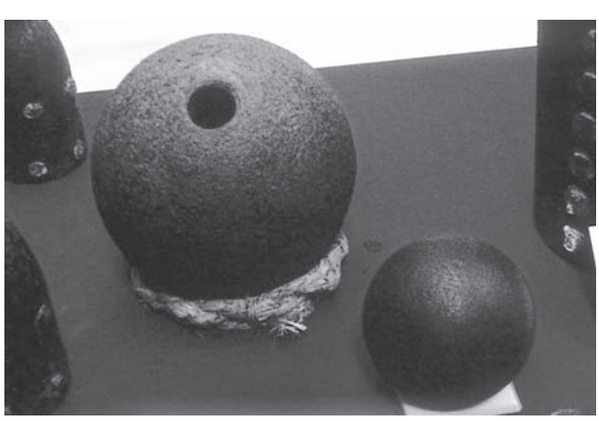
祇園山砲座と開戦直前に焼失した本丸天守の距離は、直線にして約

二〇〇〇メートル弱であり、標高では砲座構築地点がわずかに高い。この条件は重要である。射撃のつど必要な照準（射角の調整など）作業も容易となるうえ、四斤山砲で狙撃可能な距離であった。有効射程六〇〇メートルとはいうものの、装薬の分量と気象条件次第では、一メートル弱の短砲身四斤山砲で狙うことも不可能ではない。実際に本丸周辺や飯田丸への着弾も少なくなかった。目視照準で直接熊本城域の要害を砲撃できる射程内の「高地」は、祇園山の北東山腹および四方池台であることから、攻囲戦の当初より最後まで、歩兵の支援を伴う攻城砲座として運用されている。備砲の一部は、戦況に応じて山を下り、各戦闘地域へ牽引して歩兵の支援、対陣地攻撃に使用された。

二月二三日は、午前七時より高麗門口から、古城・県庁にかけて砲撃し、辺見十郎太ら一隊の県庁突入を支援した。しかし、守備兵の必死の防戦に加え、藤崎台および飯田丸近辺に拠った鎮台砲兵との山砲同士の激しい交戦で、四方池台と花岡山の砲座は一時沈黙するに至り、県庁占領も頓挫する。一方、島崎村と新町に進出した別働の砲隊は、本来の四斤山砲の有効射程による攻城砲撃で、城内の各所に砲弾を落下させた。特に弾薬貯蔵庫付近への着弾が多かったといわれ、鎮台工兵は飯田丸から伸びる屈曲部および地蔵門跡に弾薬を移し、一部は空濠に穴を掘って難を避けている。

二月二四日になると、薩軍の攻城方針が、「長囲持久の策」に決定したことに伴い、南下する政府軍の正面軍と海辺から北上する同衝背軍対策として、攻囲兵力の多数を割き田原坂・八代方面などへの投入が始まる。薩軍が包囲していたといっても、広大な熊本城を、目の粗い網で遠巻きに囲んでいたに過ぎないことが実態である。兵力の移動は、いずれ鎮台側に察知されるとしても、当分の間、これまで以上の圧力をかけておかなければならない。当然、薩軍砲兵の発砲機会は増え、応戦する鎮台砲兵との熾烈な砲戦が展開され、交戦形式の主体は砲兵戦に変化して、滞陣持久の状態に立ち至る。他方では、薩軍のこうした陽動作戦も空しく、この日を境に籠城軍の騎馬による城外突出が頻繁となり、特に千反畑・安巳橋から、遠くは九品寺あたりまで東南部方面での城外衝突が常態化していく。

４斤山砲弾（熊本城資料展示より）



20センチ臼砲弾と12センチ臼砲弾（熊本城資料展示より）

臼砲

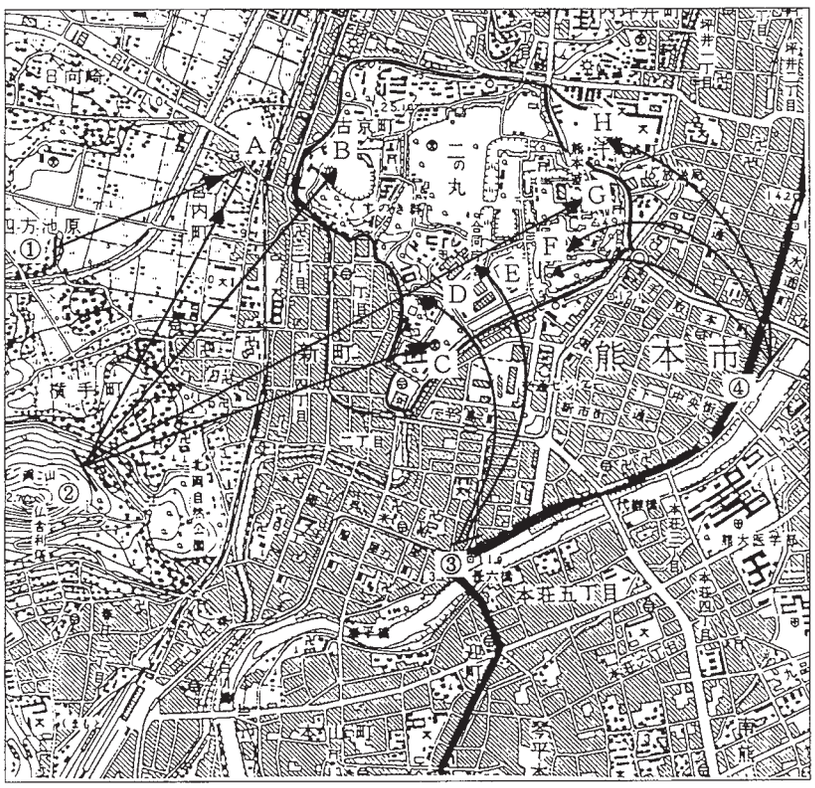
さて臼砲（きゅうほう）である。薩軍は北上するに際し、大小三〇門を牽引したが、それらは二〇ドイム・一二ドイムといわれるサイズのもので、攻城砲として運用可能な火砲であった。主力は口径二〇ド

イム（二〇cm）で、砲身長八九、六cmの青銅製である。発射角四五度で発射するように仰角を固定してあり、近距離の目標を頭上から攻撃した。臼砲弾は高い弾道から逆U字型の放物線を描いて落下するので、主として遮蔽物の背後にいる敵を攻撃する場合に威力を発揮する。臼砲の名称からも分かるように、臼（うす）のように肉厚で短い砲身形状から、発砲時のガス圧にも強く、射程距離は装薬の増減で調節した。鉄材で補強した積層の厚板からなる砲架台（基板）に取り付けられ、砲車から外しても運用可能で、大口径のわりに数名の人力で搬送可能な軽便砲であった。

熊本における攻城戦も、セオリーどおり野砲や山砲による遠距離砲撃から始まり、次に彼我の距離が近接するにおよんで小銃射撃に移り、突撃をくりかえしながら互いの塁壁に拠って膠着状態に入る。臼砲は、この段階において距離感覚を探りながら運用することで威力を発揮した。長六橋・安巳橋の際（きわ）に薩軍臼砲陣地があり、二月二七日の戦況記録には次のように猛威をふるったことが記されている。

第二砲隊田代隊は二十珊（サンチ）臼砲を安巳橋に備へ、昼夜間断なく城中を砲撃す、其飛弾猛烈、恰も城兵の頭上に落つるが如く、為に塁壁隠蔽の地も全く防守の術を失し、大いに弾薬之貯蔵に困（苦）しみたりし…

田代の臼砲隊は、三月に入り、一〇〇〇メートルほど隔たった千葉城や飯田丸へ砲撃すること激甚を極め、多大な戦果を挙げた。臼砲弾は球形の砲弾で、古くは灼熱した実体弾（焼玉式焼夷弾）が用いられたが、維新戦争の頃には、中空球形の弾体に炸薬と鉄片を詰めた榴弾が主流となり、破壊力と殺傷力は飛躍的に増大している。九月一九日より二四日に至る鹿児島城山の最終戦では、政府軍が城山攻めで用いた臼砲は、二十珊四門、十三珊一門、



戦闘初期における薩軍の主要砲座配置図

【主たる射撃目標地】
A・段山　B・片山邸　C・県庁　D・古城～一日亭　E・山砲営　F竹之丸～飯田丸　G本丸　H千葉城

【砲陣地】
①四方池砲座（四斤山砲複数門）　②花岡山砲座（四斤山砲最大運用時十二門）　③長六橋砲座（四斤および十二斤山砲・12～20センチ臼砲）　④安巳橋砲座（四斤山砲・12～20センチ臼砲）
※ほかに島崎・日向崎・出町（京町台）・赤尾口などに山砲陣地があった。臼砲は、口径のわりに軽量で搬送簡便なことから、攻囲の各地点で攻城砲として用いられ、塁壁・城壁など遮蔽物ごしの攻撃に多用され効果をあげている。

→ 山砲の直射弾道
⌒→ 臼砲の高射角弾道

十二珊二門の合計七門であった。政府軍攻城砲隊戦闘報告によると、その威力が強力すぎて惨状目を覆うばかりであったと記されている。

薩軍幹部も、維新戦争を転戦した経験から、臼砲の運用法と射撃効果は知り尽くしていた。そのため、山砲の数を上回る三〇門の大口径臼砲を牽引して来たのである。しかし、熊本城は、会津若松城と比較しても数倍の規模があり、城中の一定区域に砲弾の撒布密度を高め、戦意を喪失させ開城をはかる戦術は、物理的にも、剽悍勇猛を旨とする薩摩人の気質上からも採用し難い。さらに、比較的ゆるやかな攻囲状況下においては、籠城軍陣地に接近した近距離から射撃をおこなう臼砲隊は、城外に出没する鎮台兵の襲撃目標であった。

五　不落

熊本城域には、茶臼山の最高地点たる北東部分に本丸域があり、旧藩時代は藩政の中心機関が置かれていた。その西側二ノ丸域には、そのほかの藩庁機関と重臣の屋敷、その周りにも家臣の居宅が配置され、南部の古い城域にも三渕・藪・朽木など高禄の家臣が居住していた。自然の地形および多少の高低差を活かした梯廓式の縄張りといえる。維新後は陸軍省の管理するところとなり、旧本丸に熊本鎮台本営、旧二ノ丸に射撃場と歩兵十三連隊の屯営、古城界隈に砲兵屯営と熊本県庁が置かれ、その他、鎮台関連諸施設の集まる一大軍事基地となっていた。

旧本丸域西部の広大な城域は、高級家臣の邸宅跡石組みや藩政時代の城壁とで、石垣に囲まれた高低差をともなう中小廓状の集合体が形成されていた。それら石垣の至る所に屈曲部分が設けられ、西南戦争時は、そこに「矢掛り」と称して伏兵がひそみ、薩軍突撃隊を大いに悩ませている。鎮台兵は退却を装い、下から攻め上ってくる薩兵を誘い込み、塁壁や城壁の上から、矢掛りの部分から、猛射を加えた。開戦直前には、前年の神風連の乱を経験として、既存の小廓群とは別途に、要所要所に塹壕や土塁・鹿柴（ろくさい）を築廻し、より堅固な要塞となっていた。そのため薩軍得意の抜刀突撃も、城内に突入する前に、延々と張り巡らされた籠城軍陣地の抵抗に遭い、ほとんどその目的を達成できていない。

堅塁に拠るとはいえ、将校・下士官を除いた大多数の鎮台兵は、百姓や町人出身である。神風連の一挙以来、猛訓練で鍛え上げられ、士気は高かったとみられるが、薩摩士族との比較では劣勢をまぬがれない。薩軍の熊本城下到着前、二月一九日天守閣焼盡の事実は、鎮台兵の士気にいかなる作用をおよぼしたのか。司令長官谷干城は土佐、参謀長樺山資紀は薩摩、参謀副長児玉源太郎は長州、参謀川上操六は薩摩であり、籠城軍将校四〇名前後のなかに旧熊本藩士はいなかった。すなわち、当時の熊本鎮台幹部には、熊本城に執着し配慮する理由は何もなかった。

巨大な天守閣は、戦闘が開始されると薩軍砲兵の格好の標的となり、四方八方から砲撃を受け、早々に炎上するだろう。戦闘による焼失は、落城のイメージが重なり、兵士の士気に負の影響を惹起する。天守閣は、城の象徴的建造物である。それが開戦直前に炎上し滅失したことは、背水の陣を体現することにもなり、籠城軍将兵に一層の緊張と士気の高揚をもたらした。薩軍に対する影響では、本丸域とその周辺の目視対象物滅失による火砲照準の困難さをあげなければならない。実際、鎮台中枢部分への砲撃効果の減殺を招いてしまった。

鎮台兵の守る熊本城は、精強を誇る薩摩士族の猛攻をもってしても陥落しなかった。後年、この事実から難攻不落の城たる評価が高まった。しかし、薩軍の攻城に耐えたことをもって堅城の証明とするにはあたらない。薩軍は、鹿児島―熊本間における兵站（へいたん）や資金の調達、その他の戦闘資源の集中もままならない状態で出兵している。熊本鎮台の対応を楽観し、かつ戦闘能力を過小評価していたという側面があるにしても、熊本城攻略の失敗は、作戦計画や兵力などに関わる事前の準備不足を含めて、戦術無き攻城、攻囲の不徹底に尽きるだろう。

最後に、我が国ジャーナリストの草分け、福地源一郎（桜痴）の筆になる、攻城開始より一〇日ばかり後、明治一〇年三月六日付東京日日新聞「賊軍に背水の陣なし」の見出しで書かれた記事を掲げておく。

此等は只一目散に鹿児島を飛び出し、後陣の用意も無ければ本国への通路も保護せず、猪の荒れ出したる如く後も顧みずして猛進したれば、肥後口にのみ集合したり、尤も兵器・糧食とも敵地に因るの策にて、所謂背水決死の軍なれば、一時は剽悍なるべけれども追々弾薬は尽きる、鎮台は陥らず案に相違に体なれば、かの破るるも又数日を出ざるべしと思はる、

（※明らかな誤植は訂正した）

鹿児島の不平士族が、後先も考えず猪武者のごとく飛び出したものの、兵站にまで思いが至らず、背水の陣を決め込んだことを揶揄（やゆ）している。糧食・弾薬の尽きたところで命運も尽きるとの見方が、当時知識者層の大勢であり、福地は、籠城軍将兵にこそ背水の陣をみていたのである。

※本稿は、拙著「明治十年、熊本城の攻防」（『海路』第七号所収・海鳥社二〇〇九年一月一日刊行）を骨子に、補整を加えたものである。

※本文中に掲載した「戦闘初期における薩軍の主要砲座配置図」は、右同「明治十年、熊本城の攻防」より転載した。

【参考文献】

・川口武定『従征日記』（上下・一八七八年）青潮社一九八八復刻
・参謀本部陸軍部編纂課編『征西戦記稿』（全四巻・一八八七）青潮社一九八七復刻
・加治木常樹『薩南血涙史』（一九一二）青潮社一九八八復刻
・黒竜会編『西南記伝』（上1・2、中1・2、下1・2）原書房一九六九復刻
・陸上自衛隊北熊本修親会『新編西南戦史』一九六二
・古賀俊雄『戦袍日記』青潮社一九八六復刻
・高野和人『西南戦争　戦袍日記写真集』青潮社一九八九
・石光真清『城下の人』中公文庫一九七八
・熊本市『新熊本市史』通史編三巻（近世一）二〇〇一
・「攻城砲隊戦闘報告」（大山巌文書44ー84）国立国会図書館蔵
・財政経済学会『新聞集成明治編年史』一九五八再刊